



ぷらっとシネマ 閉じた情緒のなかの「日本の母」
『母（かあ）べえ』（山田洋次監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15465



閉じた情緒のなかの「日本の母」

——『母(かあ)べえ』(山田洋次監督)

日中戦争全面化から数年後、治安維持法が施行された。戦争反対論者であるドイツ文学者野上滋の家、或る夜、特高が来て、手縄をかけて野上を連行していく。「父さん」「母さん」を「父べえ」「母べえ」とユーモラスに呼びあう仲睦まじい野上家は、父べえを欠いた寂しく厳しい日々を過ごすことになる。妻(母べえ)佳代は、代用教員をしながら2人の娘たちを育て、いつも知れない夫(父べえ)の帰りを待つ。母娘3人の暮らしは健気でつましい。そこに父べえの教え子だった青年ヤマちゃん、父べえの妹で画学生の久子、下品だが憎めない奈良の叔父さんなどが訪れて、父べえ不在の一家を支える。戦争が激しくなり、生活物資にも事欠くようになる。父べえは、転向を迫られても屈することのないまま獄中死してしまう。身体検査で丙種不合格となったヤマちゃんにもついに赤紙が来て、出征していく。

戦争中の一家の暮らしと世情を、娘の視点で綴った野上照代のエッセイ「父へのレクイエム」の映画化である。

山田洋次監督、吉永小百合主演とくれば、ふつうなら私は回避する作品だが、事情があって見るようになった。戦争から60年を越える年月を経て、いまだにこんなかたちで反戦平和が表現されることに驚く。趣味が悪い、時代錯誤だとだけ言って済ませたいところだ。しかしベルリン映画祭に出品してまでの真剣な宣伝ぶりを見て、これはちゃんと批判しておこうと思うようになった。ではこの作品の何が問題なのか。

第1に、ここにあるのはひたすらに人々(日本人)の被害の経験としての戦争である点。戦争のせいでひもじかった、モノがなかった、不自由だった、兵隊にとられた、しょっぴかれて獄死した、被爆した。人々はあの戦争でひどい被害をこうむったという表現でいっぱいである。こういう戦争観については、戦後なんども疑問がつきつけられ、議論がなされてきたはずではなかったか。民衆はただ被害者であったわけではなかった。母べえは、代用教員として少国民育成に関与した。ヤマちゃんは、アジアの戦場で非戦闘員に銃を向けたかもしれず、慰安所に行ったかもしれない。民衆も積極的に戦争をになった。そこにこそ、国家による戦争が遂行される仕組みの鍵がある。

山田洋次は、時代の体制に翻弄される庶民の静かな抵抗を描いたつもりのようなのだ。しかし彼の描く庶民は、日本だけで閉じている。満州で育った山田は、中国民衆の抵抗がどれほどのものであったかという想像力をもたないのだろうか。この疑問は、映画のなかの父べえの反戦思想がどれほどの具体性と展望に支えられたものであったのかという疑問にもつながる。

第2に、タイトルを『母べえ』としていることにも表われているが、母という位置に限っての女性礼賛に終始している点。佳代は、夫の逮捕、獄中死という結末に至った理由である彼の思想の中味を理解してはいない。なぜ彼が中国との戦争に反対しているのか。中国でなにが起こっているのか。なぜ戦争に反対すると当局から睨まれるのか。夫の逮捕は、だれか親しい知人が特高に通報したからではないのか。そんなふうに佳代の関心が発展していくことはない。

佳代は、娘を愛し慈しむ母だというだけではない。ヤマちゃんが佳代に密かに思いを寄せていることを、久子が佳代に指摘する場面がある。ヤマちゃんが佳代に惹かれる理由は、なにより母としての彼女の姿にある。ヤマちゃんの思いは女性への恋慕の情ではなく、母への慕情と言うべきものだ。佳代は、時局にも思想にもたいして関心をもつことなく家族を愛する、いわば「日本の母」である。

映画の最後で、戦後数十年を生き延びた佳代が死の床で言う言葉がある——「父べえともヤマちゃんとも、あの世でなく会いたかった」。現世で会いたかったという生々しさと激しさを吉永小百合の演技に期待するのはしよせん無理だが、実はそれは俳優の技量の問題ではない。佳代を「日本の母」として描いたあとでは、エロスにも通じるこの種の激情の表現は、浮いたかんじだけが残る。また、娘がその言葉を復唱して母にとりすがって号泣するのはいかにも趣味が悪い。映像ならではの悲しみの表現は、ほかにいくらでもあろう。

他国に戦争を仕掛けた時代の日本を、日本だけの閉じた情緒的な輪のなかで描こうという山田の試みは、いまま戦争の連鎖のなかにある21世紀の世界では空回りするばかりだ。

(2007年、日本映画、132分)